

シロアリ防除用 土壌処理剤

アジェンダ[®]SC

技術資料



はじめに

有効成分フィプロニルは、1981年にバイエルクロップサイエンス（旧ローヌプーラン）により合成され1987年に日本で開発された、これまでの殺虫剤グループに属さない、新しいタイプのフェニルピラゾール系殺虫剤です。

アジェンダSCは、そのフィプロニルを有効成分とした、従来の殺虫剤とは異なる独自の作用機作を持った、土壌処理用シロアリ防除剤です。微臭性で、極く低薬量で効果を発揮しますが忌避性はなく、伝播効果に優れています。つまり、シロアリが互いに接触するたびに効果が広がるため、巣まで駆除することが可能です。

フィプロニルは、蒸気圧が低く、土壌への吸着力が強いため、長い残効性が期待でき、施工方法についても従来の防蟻剤とは異なり、全面処理をすること無く、建築物の内周の帯状処理だけで防除できます。

つきましては、この技術資料に本剤の特性を要約致しましたので、ご使用に際して本資料を是非お役立ていただきますよう、お願い申し上げます。

目次

I	アジェンダSCの概要	1
II	用法・用量	2
III	アジェンダSCの特長	3
IV	安全性	4
V	アジェンダSCの生物効果	5
VI	土壌移行性	6
VII	土壌処理による気中濃度	8
VIII	各種建築材料に対する影響	9
IX	取扱い上の注意	10

I アジェンダSCの概要

成分及び性状

① 有効成分

一般名：フィプロニル (fipronil)

化学式：5-アミノ-1-(2,6-ジクロロ-4-トリフルオロメチルフェニル)-3-シアノ-4-トリフルオロメチルスルフィニルピラゾール

② 有効成分の性状

分子式：C₁₂H₄Cl₂F₆N₄O₅

分子量：437.14

外 観：白色粉末結晶

融 点：195.9–203℃

蒸気圧：3.7×10⁻⁹hPa

溶解度：水1.9mg/L、ヘキサン0.03g/L、ジクロロメタン22.3g/L、メタノール137.5g/L、アセトン545.9g/L

分配係数：Log Po/w:4.00(20℃)、n-オクタノール/水

③ 製剤の性状(フィプロニル9.1%W/Wを含むフロアブル剤)

外 観：微黄褐色の白濁した液体

臭 気：微臭性

pH : 5.0–8.5

比 重：1.06 (20℃)

安定性：40℃、3ヶ月後で外観、有効成分量に変化なし（室温3年に相当）。–5℃以下で凍結することがあるが、室温下で自然解凍し、性状に変化なし。

引火点：引火性なし。

毒劇物区分：医薬用外劇物（1%以下は普通物。マイクロカプセル製剤の場合は5%以下が普通物）。

危険物表示：消防法非危険物。

包装形態：1kgポリエチレンボトル×6本/段ボール入り。

認 定：(社) 日本しろあり対策協会 登録番号 第3486号

(社) 日本木材保存協会 認定番号 A-4220

III

用法・用量

① 使用希釈倍率

本剤 1 kg を水 299 L で希釈して（300 倍）、散布液のフィプロニル濃度が 0.03% となるように調製して散布する。

注意事項：本剤の希釈作業時など、本剤を取り扱う際には必ずマスクを着用して下さい。

② 処理液量及び処理方法

・ 帯状処理

建物の床下の基礎、束石周囲及び配管等の立ち上がり周囲の土壌に対して、壁際から帯状に 20 cm 幅で薬剤を処理してください。薬剤の散布量は長さ 1 m あたり 1 L として、低圧力のポンプやジョウロ、飛散の少ないノズル等で処理（帯状処理）して下さい。

また、玄関や風呂場等の壁面への穿孔吹付け、穿孔注入処理も効果的です。

（注意事項：床下へ処理する際には、面状散布をしたり、ポンプを高圧力で処理しないで下さい。また、マスク等の保護具を必ず着用して下さい。）

ただし、建築物の外周の防除処理が必要な場合には上述の帯状処理と併用して、次の方法により外周処理^{*}を行って下さい。

・ 外周処理

トレンチング処理（溝処理）

ロッジング処理（土壌注入処理）

^{*}巻末（付録）へ処理方法を記載させていただきましたので、ご参照ください。

III

アジェンダSCの特長

- ・ 帯状処理のみでシロアリの防除が可能です。
- ・ 低濃度の処理で残効性に優れ、高い防蟻効果を発揮します。
- ・ 薬剤臭が極めて少なく、蒸気圧も低い薬剤です。
- ・ 従来の忌避剤のようにバリアーで建築物を守るのではなく、本剤には忌避性が無く、また伝播性があるため、薬剤に気づくことなく接触したシロアリがグルーミングなどで他の仲間に薬剤を伝播することにより積極的にシロアリを退治します。
- ・ 土壌への吸着が強く、揮散移行性がないため、残効性に優れ、土壌処理剤として適しています。

接触効果試験：

あらかじめ1週間以内にLC50になる濃度（0.01ppm）のフィプロニル（実使用濃度の3万分の1）を使用し、5,000頭のシロアリを薬剤処理土壌（フィプロニルの放射性同位体¹⁴C-フィプロニルを使用）へ2日間接触させ、その後無処理の土壌へシロアリを移し100%死亡するまでの時間を測定しました。2日後の1頭あたりのフィプロニルの摂取量は平均0.17-0.25ng（10億分の1グラム）でありましたが、この摂取量で全てのシロアリは動かなくなり、4日後には全ての供試虫が死亡していました。

伝播効果試験：

接触効果試験と同様に、0.01ppmのフィプロニル処理土壌へ500頭のシロアリを2日間接触させ、その後の500頭のシロアリ（あらかじめ青色に着色）と一緒に無処理土壌へ放虫し、伝播効果を測定しました。

5日後の調査において、フィプロニルに直接接触したシロアリからは約0.07ng/頭、非接触のシロアリ（青色シロアリ）で約0.05ng/頭が検出され、それぞれ92%及び78%の死虫率が観察されました。

これらの試験結果から、シロアリ剤アジェンダSCは極低濃度でシロアリへの高い効果があり、比較的低い処理薬剤量で長い残効性が期待できます。

IV 安全性

毒性試験

アジェンダSC及びフィプロニルの毒性試験結果の要約を示します。

試験の種類	供試動物	投与方法	LD50値又は最大無作用量 (mg/kg)
急性毒性/原体	ラット	経口	♂ : 92 ♀ : 103
	マウス	経口	♂ : 49 ♀ : 57
	ラット	経皮	♂♀ : >2000
SC製剤	ラット	吸入 (LC50)	♂♀ : 682mg/m ³
	ラット	経口	♂ : >1183 ♀ : 2369
	ウサギ	経皮	♂♀ : 2000
刺激性/原体	ウサギ	吸入 (LC50/4h)	♂♀ : 1700mg/m ³
	ウサギ	眼	刺激性無し
	ウサギ	皮膚	刺激性無し
SC製剤	ウサギ	眼	極軽度の刺激性あり
	ウサギ	皮膚	極軽度の刺激性あり
	ウサギ	眼	極軽度の刺激性あり
皮膚感作性/原体	モルモット	Maximization法	陰性
	モルモット	Buehler法	陰性
	モルモット	Buehler法	陰性
(以下、全て原体)	ラット	混餌	♂♀ : 0.07
	イヌ	強制経口	♂♀ : 0.5
慢性毒性	ラット	混餌	♂ : 0.02 ♀ : 0.03
	マウス	混餌	♂ : 0.055 ♀ : 0.063
	イヌ	強制経口	♂♀ : 0.2
発がん性	ラット	混餌	陰性
繁殖毒性	ラット	混餌	繁殖への影響なし
催奇形性	ラット	混餌	催奇形性なし
	ウサギ	混餌	催奇形性なし
変異原性			
復帰変異	細菌	in vitro	陰性
染色体異常	ヒトリンパ球	in vitro	陰性
DNA損傷・修復	細菌	in vitro	陰性

有用生物に対する影響について

① 魚介類に対する影響 (原体)

コイ LC50 (48時間) : 0.34ppm

ミジンコ LC50 (3時間) : < 1ppm

フィプロニルは水生の甲殻類 (エビやカニなど) に特に高い毒性があるので、河川や湖沼、下水道などを薬剤で汚染しないように注意する事。

② 鳥類に対する影響 (原体)

マガモ 急性経口 : 2150mg/kg 急性混餌 : >5000mg/kg

ウズラ 急性経口 : 11.3mg/kg 急性混餌 : 48mg/kg

スズメ 急性経口 : 1120mg/kg

ハト 急性経口 : >2000mg/kg

原体を用いた上記の試験では、マガモ、スズメ及びハトには高い安全性を示したが、ウズラに対しては比較的強い毒性を示した。この事から、一般の鳥類に対しては安全性が高いが、キジ類に対してだけは注意が必要である。

③ ミミズに対する影響 (原体)

LD50 (7日間) : >1000mg

LD50 (14日間) : >1000mg

原体を用いた上記の人工土壌混入試験の結果は、ミミズに対して高い安全性が確認された。

V

アジェンダSCの生物効果

アジェンダSCは下記の通り公的試験を行っており、全ての試験（使用濃度0.03%）において、性能基準を満足する結果となっています。

室内防蟻効力試験結果

日本木材保存協会の規定する「土壌処理用防蟻剤等の防蟻効力試験方法および性能基準（JWPS-TS-S）の室内試験」に従って試験を行った。

- ・東京農業大学 林産化学研究室
 供試薬剤：アジェンダSC
 供試濃度：フィプロニル 0.03%（300倍）
 耐候操作：あり

試験区番号	芽孔距離 (mm)	芽孔度	死虫率 (%)	備考	
処理土壌区	1	4	1	100	
	2	8	1	100	
	3	0	0	100	
	4	5	1	100	
	5	8	1	100	
無処理土壌区	1	50	5	14	無処理土壌区は、全て24時間以内に貫通した。
	2	50	5	5	
	3	50	5	17	
	4	50	5	10	
	5	50	5	12	

- ・近畿大学 農学部 森林資源化学研究室
 供試薬剤：アジェンダSC
 供試濃度：フィプロニル 0.03%（300倍）
 耐候操作：あり

試料	穿孔距離 (mm)	穿孔度	死虫率 (%)	備考	
300倍希釈	1	15	2	100	
	2	15	2	100	
	3	17	2	100	
	4	18	2	100	
	5	19	2	100	
無処理土壌	1	50	5	—	1日以内に貫通
	2	50	5	—	
	3	50	5	—	
	4	50	5	—	
	5	50	5	—	

野外防蟻効力試験

日本木材保存協会の規定する「土壌処理用防蟻剤等の防蟻効力試験方法（JWPS-TS-S）の野外試験」に準じて実施した。

供試薬剤：アジェンダSC（300倍希釈、有効成分として0.03%）

試験場所：鹿児島県日置郡金峰町 松砂防国有林 近畿大学野外シロアリ試験場

試験開始年月日：1999年4月12日

最終調査日：2002年5月10日

処理土壌 区番号	木材片の食害の有無			備 考
	1年目	2年目	3年目	
1	無し	無し	無し	無処理区の木材片は全て1年目から被害が認められた。2年目、3年目も被害は継続した。
2	無し	無し	無し	
3	無し	無し	無し	
4	無し	無し	無し	
5	無し	無し	無し	

VI

土壌移行性①

- ・ 供試土壌：畑土、砂壤土
- ・ 供試薬剤：アジェンダSCの150倍希釈液（フィプロニル濃度0.06%）
- ・ 薬剤処理量：10L/m²
- ・ 試験方法：土性の異なる2種類の土壌カラム（内径90mm、高さ400mm）の上にアジェンダSC150倍希釈液を10L/m²相当量を均一に処理後、24時間室温に放置し、その後カラム上部から蒸留水1200mlを0.5ml/分の流速で滴下した。
- ・ 試験結果は以下とおり。

土壌カラム (処理土壌層cm)	有効成分/フィプロニルの分布(%)	
	畑土（鹿児島）	砂壤土
0~5	98.7	98.4
5~10	1.3	1.6
10~15	0.0	0.0
15~20	0.0	0.0
20~25	0.0	0.0
25~30	0.0	0.0
30~35	0.0	0.0
35~40	0.0	0.0
流下水	0.0	0.0

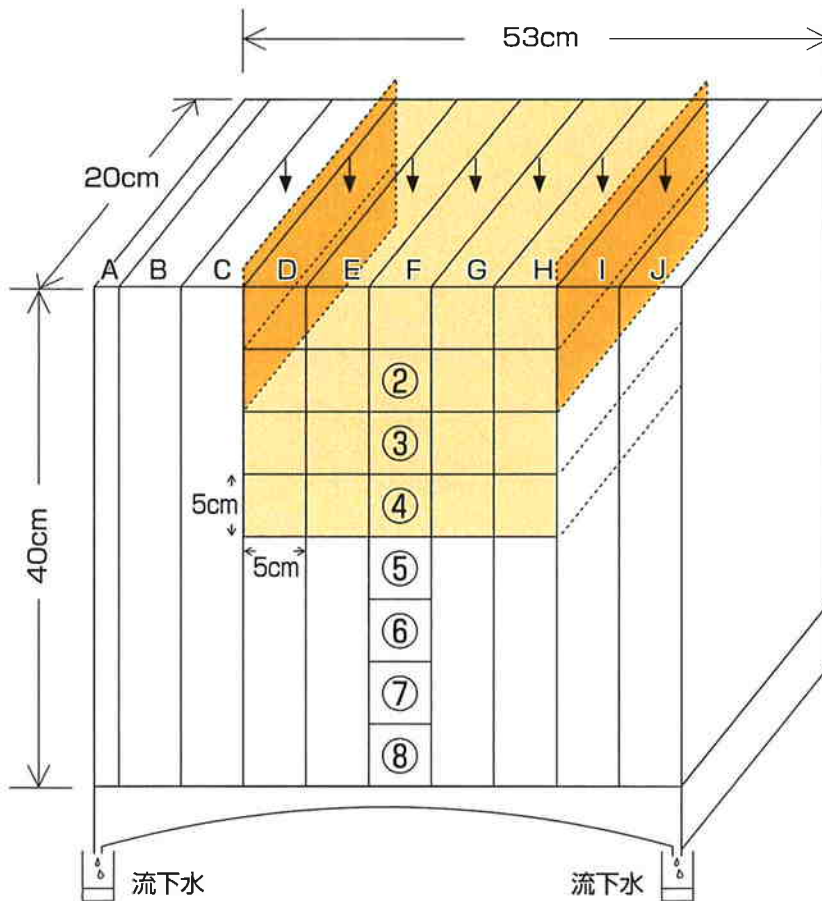
- ・ 所見：アジェンダSCの150倍希釈液を10L/m²で処理した場合、有効成分のフィプロニルは土壌表層より約5cm以内に殆どが分布しており、降雨等の水による流下移行は殆ど無い事が確認できた。

VI 土壤移行性②

家屋の基礎周辺に幅20cmで5L/m相当量を深さ20cmの土壤に均一に混合した後、埋め戻した場合のフィプロニルの土壤移行性を確認する（セミフィールド試験）。

- ・ 供試土壤:山土
- ・ 供試薬剤:アジェンダSCの300倍希釈液(フィプロニル濃度0.03%)
- ・ 薬剤処理量:5L/m(幅20cm、深さ20cmの土壤量)
- ・ 試験方法:アジェンダSCの300倍希釈液の所定量を土壤に処理し均一に混合し、処理土壤とした。特製の試験容器の所定場所に所定量の処理土壤と無処理土壤を充填し、土壤表面から蒸留水1200mlを0.5m¹/分の流速で滴下した。(図1)

(図1)



- 処理土壤区: D E F G H ② ③ ④
- 無処理土壤区: B C I J ⑤ ⑥ ⑦ ⑧
- ↓ 水の滴下場所区: C D E F G H I の土壤表面中央から滴下
- 仕切板の場所: CとD区の間、HとI区の間
- D E F G H 区: 充填後、土壤表面を無処理の土壤で1cmの厚みで被覆した。

・ 試験結果

有効成分/フィプロニルの残存率及び(分布) (%)								
区	土壌層(cm)	土壌	流水前	流水後	区	土壌層 (0~5cm)	流水前	流水後
F	0~5	処理土壌	100	100	B	無処理土壌	0	(0)
②	5~10	処理土壌	100	100	C	無処理土壌	0	(0)
③	10~15	処理土壌	100	100	D	処理土壌	100	100
④	15~20	処理土壌	100	100	E	処理土壌	100	100
⑤	20~25	無処理土壌	0	(0)	F	処理土壌	100	100
⑥	25~30	無処理土壌	0	(0)	G	処理土壌	100	100
⑦	30~35	無処理土壌	0	(0)	H	処理土壌	100	100
⑧	35~40	無処理土壌	0	(0)	I	無処理土壌	0	(0)
-	流下水	-	0	(0)	J	無処理土壌	0	(0)

- ・ 所見：アジェンダSCの300倍希釈液の所定量を土壌に処理し均一に混合した(処理土壌)場合のフィプロニルの土壌移行性を確認した。
本条件下で処理した場合、有効成分のフィプロニルは100%処理土壌に残存しており、降雨等の水による流下移行は認められなかった。
なお、試験容器下部から採取した流下水において、フィプロニル濃度は検出限界以下であった。

VII 土壌処理による気中濃度

アジェンダSCを一戸建て既存住宅の床下土壌へ帯状処理し、処理前、処理中、処理3時間後、処理1日後、処理2日後の床下、布基礎換気口付近、台所、居間のフィプロニル濃度を測定した(薬剤調製中と散布中は作業従事者の口元付近の濃度も測定した)。

- ・ 試験場所：茨城県牛久市。
- ・ 供試薬剤：アジェンダSC (フィプロニル9.1%SC)。
- ・ 処理量：300倍希釈液を白対協の仕様書に準じて帯状処理。
- ・ 試料採取と分析：多孔性けいそう土カラムにて各測定箇所から流速2L/分で20分間(薬剤調製中は5分間、散布中は120分間)採取。各試料から抽出後、精製しGC-NPDで分析した。
- ・ 採取箇所：床下、布基礎換気口付近、台所、居間(薬剤調製時と散布中は作業従事者の口元付近)。なお、薬剤調製時及び散布中に使用した活性炭マスクからの分析も行った。
- ・ 検出限界：気中濃度は0.0005mg/m³、マスクは1μg/m³。
- ・ 測定試験結果：下表の通り。

表1：気中濃度の測定結果

	気中濃度 (mg/m ³)					捕集時間 (分間)
	床下	換気口付近	台所	居間	口元付近	
散布直前	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	-	20
薬液調製時	-	-	-	-	<0.0020*	5
散布中	<0.0005	0.0006	<0.0005	<0.0005	0.0040	120
散布3時間後	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	-	20
散布1日後	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	-	20
散布2日後	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	-	20

*：薬液調製時の捕集時間が5分の為、検出限界は4 (20/5) 倍となる。

表2：活性炭マスクの分析結果

活性炭マスク	口側フィルター ($\mu\text{g}/\text{マスク}$)	活性炭 ($\mu\text{g}/\text{マスク}$)	外側フィルター ($\mu\text{g}/\text{マスク}$)
散布液調製中に使用	<1.0	<1.0	<1.0
散布中に使用	<1.0	<1.0	10.3

・結果と考察：

アジェンダSCを床下へ帯状処理した際の気中濃度（表1）は、散布中の作業
口元付近 ($0.004\text{mg}/\text{m}^3$) 及び換気口付近 ($0.0006\text{mg}/\text{m}^3$) で検出限界以上の
フィブロニルが確認された以外は、いずれの箇所及び時間においても検出限界未満
であった。また、作業者が作業中に使用した活性炭マスクにおいては、散布中に使
用したマスクの外側のフィルターのみからフィブロニルが検出された。

これらの事から、アジェンダSCを帯状処理する際、散布液の一部が微細な霧状に
なり作業者が暴露する恐れがあるものの、マスク等の防護具によりその殆どが防
がれると考えられる。従って防護具の着用は薬剤暴露の観点からも非常に重要であ
り、散布液のミストを抑える目的で散布時の圧力を抑えたり、飛散を抑えるノズル
を使用する事も有効であると考えられる。

VIII

各種建築材料に対する影響

アジェンダSCの希釈液が各種建築材料に付着した場合の材質に与える影響を確認した。

- ・ 供試薬剤：アジェンダSC希釈液
- ・ 供試資材：硬質塩化ビニル樹脂（水道管）、軟質塩化ビニル樹脂（電気コード）、銅釘、真ちゅう釘、鉄コンクリート用釘、ナット（クロムメッキ）、コンクリートブロック、化粧タイル、発泡樹脂（ポリエチレン）。
- ・ 処理方法：供試薬剤へ30日間浸漬（硬質塩化ビニル樹脂、軟質塩化ビニル樹脂、釘類、ナット）。供試薬剤を塗布し、直射日光下に30日間放置（コンクリートブロック、化粧タイル、発泡樹脂）。
- ・ 調査方法：重量及びサイズの変化を測定（硬質塩化ビニル樹脂、軟質塩化ビニル樹脂、釘類、ナット）。変色を肉眼で観察（コンクリートブロック、化粧タイル、発泡樹脂）。
- ・ 試験結果：下表の通り。

供試資材	材質の変化	変色
硬質塩化ビニル樹脂（水道管）	なし	—
軟質塩化ビニル樹脂（電気コード）	なし	—
銅釘	なし	—
真ちゅう釘	なし	—
鉄コンクリート用釘	あり*	—
ナット（クロムメッキ）	なし	—
コンクリートブロック	—	なし
化粧タイル（白色）	—	淡黄色に変色**
発泡樹脂（ポリエチレン、白色）	—	微黄色に変色***

* : 錆が発生しており0.09～0.15%の質量減少率を示した。

** : 表面の薬剤付着部分が淡黄色に変色したが、水洗により除去可能。

*** : 表面の薬剤付着部分が微黄色に変色したが、変形等は見られなかった。

IX

取扱い上の注意

【安全使用上の注意】

1. 用法、用量を厳守して使用して下さい。間違った使い方をされた場合、生じた事故についての責任は負う事ができません。また、間違った使い方をする、効果が十分でなかったり、健康を害する事があります。
2. 使用前に、必ずラベルをよく読み、十分理解した上で使用して下さい。
3. 作業前に保護具及び機械器具は、予めよく点検整備しておいて下さい。
4. 本剤の使用に際しては、施行現場の環境を十分に把握し、防蟻施工の安全性が確保された後に作業を開始して下さい。
5. 水生生物、特に甲殻類に対し毒性が高いため、河川、沼、池などを汚染する恐れのある場合には使用しないようにして下さい。
6. 本剤を希釈するときは、薬剤がかからないようにして均一に攪拌して下さい。また、容器は専用のものを使用し、特に忌避性のある薬剤とは併用しないで下さい。
7. 使用の際には、その都度必要量を調整し、使い切るようにして下さい。
8. 居住者及び近隣の住民が薬剤に被曝しないように細心の注意を払って下さい。また薬剤が飛散しないように低圧でシャワー状に処理するかジョロなどを使用して処理して下さい。
9. 本剤を他の薬剤と混合しないで下さい。
10. 居住者や近隣の住民に、病人、特異体質者(アレルギーや化学物質に過敏な体質等)、妊婦、乳幼児等が居る場合には、薬剤の影響が出ない様に予め関係者や掛付けの医師と相談してもらうなどして十分に配慮して下さい。薬剤によって、アレルギー症状やカブレ等を起こしやすい特異体質の人、また健康状態のおもわしくない人は、薬剤の処理作業には従事しないで下さい。
11. 食品、食器、おもちゃ、愛玩動物、飼料、寝具、衣類、美術品、楽器などは予め他へ移すかあるいは格納し、薬剤がかからないようにして下さい。

【使用中または使用後の注意】

1. 作業中に薬剤に接触することを避けるため、長袖の作業着、作業帽、ゴム手袋、保護メガネ、マスクなど保護具を必ず着用して下さい。
2. 塗装面や合成樹脂、石材、モルタル、白木などのなかには、本剤がかかると変色する場合がありますので予め覆いをするなど本剤がかからないようにして下さい。
3. 本剤の調製、処理の作業中は喫煙、飲食をしないで下さい。また作業中や作業後にトイレに行くときは、手や顔をよく洗ってから行ってください。
4. 本剤が皮膚についたときや処理作業後は、手や顔を石鹸水でよく洗い、水でうがいをして下さい。また、眼に入ったときは、直ちに多量の水でよく洗眼し、炎症が続くときは眼科医の手当てを受けて下さい。
5. 作業中に大量の薬剤がかかったときには、出来るだけ早くシャワーを浴びるなどして薬剤を洗い落としその後、清潔な衣服に着替えて下さい。また、必要に応じて医師の診断を受けて下さい。

6. 本剤の使用により、頭痛、目や喉の痛み、咳、めまい、吐き気、気分が悪くなったときなどには、直ちに作業を中止し、風通しのよい場所に移動し、安静にして医師の手当てを受けて下さい。万一、誤って飲み込んだ場合は、直ちに医師の手当てを受けて下さい。医師の診察を受ける際には、本剤がフィプロニルであることを告げて下さい。動物実験ではフェノバルビタール製剤の投与が有効であると報告されています。
7. 使用中、周辺に被害を及ぼす可能性のある事故が発生したときは、直ちに関係機関に通報して下さい。
8. 作業に使用した衣服は、他の衣服と区別して洗濯し、保護具も洗剤を使ってよく洗って下さい。調製や薬剤処理に用いた機械器具類もよく洗って下さい。
9. 使用済みの空容器などは、石鹼水でよく洗い、小児が触れないようにするとともに、他に転用しないで下さい。
10. 汚染した器具や洗浄液は、作業現場から持ち帰り、廃棄にあたっては都道府県知事の認可を受けた産業廃棄物処理業者に処理を依頼して下さい。河川、湖沼、下水、井戸などへの放流や地下水を汚染する恐れのある場所には絶対に捨てないで下さい。

【保管上の注意】

1. 食品、食器、飼料などと区別し、小児の手の届かない場所に置いて下さい。
2. 施錠できる劇物倉庫に保管して下さい。また、関係者以外は触れないようにして下さい。
3. 直射日光を避け、乾燥した涼しい場所で必ず密栓して保管して下さい。
4. 使用後に残った薬剤原液は、ラベル表示のある元の容器に戻し、密栓をして他の物と区別して保管して下さい。また、一度開封したものは出来る限り早く使い切して下さい。
5. 盗難、紛失の場合には、直ちに警察に届けて下さい。

【その他の注意】

1. 購入した薬剤は速やかにお使いになって下さい。
2. 万一、薬剤が漏洩したときは、吸収性の媒体、例えば砂、ポロ布、オガクズなどに吸着させ、広がりを阻止して下さい。
3. 漏洩した薬剤が井戸、池、河川などの水系に流入した場合は、直ちに警察または保健所に届けて下さい。
4. なお、薬剤を使用する際は「しろあり防除施工における安全管理基準」(社団法人日本しろあり対策協会)に従って下さい。
5. 使用に際してのご不明な点や事故などがあった場合は、製造元バイエルクロップサイエンス(株)エンバイロサイエンス事業本部(TEL: 03-6266-7368)へ連絡して下さい。